連載　子供に聞かせたい、こんな話　その20

こころざし高く

きつねはどんな気持ちでおおかみとたたかったのでしょう。なぜはずかしそうにわらって死んだのでしょう

きつねのおきゃくさま

むかしむかし、あったとき。はらぺこきつねが歩いていると、やせたひよこがやってきた。がぶりとやろうと思ったが、やせているので考えた。太らせてから食べようと。そうとも。よくある、よくあることさ。「やあ、ひよこ。」「やあ、きつねのお兄ちゃん。」「お兄ちゃん？　やめてくれよ。」きつねは、ぶるるとみぶるいした。でも、ひよこは目をまるくして言った。「ねえ、お兄ちゃん。どこかにいいすみか、ないかなあ。こまってるんだ。」きつねは、心の中でにやりとわらった。「よしよし、おれのうちにきなよ。」すると、ひよこが言ったとさ。「きつねのお兄ちゃんって、やさしいねえ。」「やさしい？　やめてくれったら、そんなせりふ。」でも、きつねは、生まれてはじめて「やさしい」なんて言われたので、少しぼうっとなった。ひよこをつれてかえるとちゅう、「おっとっと、おちつけおちつけ。」切りかぶにつまずいて、ころびそうになったとさ。きつねは、ひよこに、それはやさしく食べさせた。そして、ひよこが「やさしいお兄ちゃん」と言うと、ぼうっとなった。ひよこは、まるまる太ってきたぜ。

ある日、ひよこが、さんぽに行きたいと言い出した。―　はあん、にげる気かな。きつねは、そうっとついていった。ひよこが春の歌なんか歌いながら歩いていると、やせたあひるがやってきたとさ。「やあ、ひよこ。どこかにいいすみかはないかなあ。こまってるんだ。」「あるわよ。きつねのお兄ちゃんちよ。あたしといっしょに行きましょ。」「きつね？　とおんでもない。がぶりとやられるよ。」と、あひるが言うと、ひよこは首をふった。「ううん。きつねのお兄ちゃんは、とっても親切なの。」それをかげで聞いていたきつねは、うっとりした。そして「親切なきつね」という言葉を、5回もつぶやいたとさ。さあ、そこでいそいでうちにかえると、まっていた。きつねは、ひよことあひるに、それは親切だった。そして、ふたりが「親切なお兄ちゃん」の話をしているのを聞くと、ぼうっとなった。あひるも、まるまる太ってきたぜ。

ある日、ひよことあひるが、さんぽに行きたいと言い出した。―　はあん。にげる気かな。きつねは、そうっとついていった。ひよことあひるが、夏の歌なんか歌いながらあるいていると、やせたうさぎがやってきたとさ。「やあ、ひよことあひる。どこかにいいすみかはないかなあ。こまってるんだ。」「あるわよ。きつねのお兄ちゃんちよ。あたしたちといっしょに行きましょ。」「きつねだって？　とおんでもない。がぶりとやられるぜ。」「ううん。きつねのお兄ちゃんは、神さまみたいなんだよ。」それをかげできいたきつねは、うっとりして、きぜつしそうになったとさ。そこで、きつねは、ひよことあひるとうさぎを、そうとも、神さまみたいにそだてた。そして3人が「神さまみたいなお兄ちゃん」の話をしていると、ぼうっとなった。うさぎも、まるまる太ってきたぜ。

ある日。くろくも山のおおかみが下りてきたとさ。「こりゃ、うまそうなにおいだねえ。ふんふん、ひよこに、あひるに、うさぎだな。」「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」言うなり、きつねはとびだした。きつねの体に、ゆうきがりりんとわいた。おお、たたかったとも、たたかったとも。じつに、じつに、いさましかったぜ。そして、おおかみは、とうとうにげていったとさ。そのばん。きつねは、はずかしそうにわらってしんだ。まるまる太った、ひよことあひるとうさぎは、にじの森に、小さいおはかを作った。そして、せかいーやさしい、親切な、神さまみたいな、その上ゆうかんなきつねのために、なみだをながしたとさ。とっぴんぱらりのぷう。

（あまん　きみこ作：小学校1～3年生用こころざし教育副読本に掲載）

お問合せ先：教育支援館　☎5246-5921

◆ 中央図書館の催し物 ◆

台東区ゆかりの文学コーナー企画展

日記が語る台東区その3 蘭学者がつづる江戸～柴田収蔵日記～

中央図書館内ゆかりの文学コーナー企画展では、「日記が語る台東区」シリーズその3として『柴田収蔵日記』を行っています。

『柴田収蔵日記』は、佐渡宿根木（しゃくねぎ）出身の蘭学者・柴田収蔵による、天保13年(1842)、同14年、弘化５年(1848)、嘉永３年(1850)、安政３年（1856）の日記です。本企画展は、日記から江戸に勉学に出てきた地方文人の足跡、池之端の本屋で書籍を求め、浅草で飲食するなど台東区の商店の様子、また、亡くなった師匠の記念碑を建てる費用を捻出するために奔走する様子など、生き生きとした幕末の台東区の記事をピックアップして紹介します。

- ▶場　　所：台東区立中央図書館2階 郷土・資料調査室内 ゆかりの文学コーナー
- ▶期　　間：平成28年6月17日(金) ～ 平成28年9月14日(水)
- ▶開館時間：月～土曜日　午前9時～午後8時
  日曜・祝日　午前9時～午後5時
- ▶休 館 日：毎月第3木曜日

●専門員によるスライド・トークを開催いたします。

- ▶場　　所：台東区生涯学習センター504教育研修室
- ▶日　　時：9月8日（木）　午後1時30分～午後2時
- ▶定　　員：先着５０名（申込不要）

お問い合わせ先：〒111-8621　台東区西浅草3－25－16
台東区立中央図書館郷土担当　☎5246－5911

池波正太郎記念文庫では、池波正太郎にまつわるシンポジウムや写真展を企画しています。ぜひ足をお運びください。

池波正太郎記念文庫開設15周年記念シンポジウム

担当編集者とカメラマンが語る－「あの時の池波正太郎」

池波正太郎記念文庫は、平成13年9月26日に開設し、今年で15周年を迎えることを記念して池波正太郎の担当編集者・カメラマンの方々によるシンポジウムを開催します。

ゲストは、鈴木 文彦氏（元文藝春秋）、筒井 ガンコ堂氏（元平凡社）、酒井 義孝氏（元新潮社）、但馬 一憲氏（元講談社）です。

- ▶日　　時：平成28年9月17日（土）午後2時開演
- ▶会　　場：台東区生涯学習センター2階ミレニアムホール
- ▶定　　員：300名（申込多数の場合は抽選）
- ▶申込方法：往復はがき（1人1枚）に、イベント名（講演会）・申込者の住所・氏名（ふりがな）・電話番号を記入。返信の裏面は無記入とし、表面に申込者住所・氏名を記入して下記お問合せ先まで。
- ▶申込締切：平成28年8月31日（水）必着

池波正太郎真田太平記館姉妹館提携10周年記念

写真展　池波作品の舞台は今！『真田太平記』－後編－

毎年、池波作品に描かれた舞台の今を写真で紹介する企画展を開催しており、今回は昨年に引き続き『真田太平記』です。物語後半にあたる関ヶ原・伏見・大坂・九度山などを取材し、紹介します。

- ▶日　　時：平成28年9月16日（金）～平成28年12月14日（水）
- ▶会　　場：台東区立中央図書館内　池波正太郎記念文庫
- ▶開館時間：月～土曜日　午前9時～午後8時　日曜・祝日　午前9時～午後5時
- ▶休 館 日：毎月第3木曜日（館内整理日・祝日に当たる場合はその翌日）

お問合せ先：〒111-8621　台東区西浅草3－25－16
台東区立中央図書館池波正太郎記念文庫　☎5246－5915

リレートーク　連載21

“みんなの居場所作り”としての保育園

保育園長会　幹事
齋藤　美喜
（玉姫保育園　園長）

「A君がおもちゃ取っちゃった」と泣くB君。A君はおもちゃを持って保育士をじっと見ています。

「取られて嫌だったね。」「欲しかったの？B君は取られて嫌だったんだって。」と、保育士が2人の子供を繋ぐことがあります。

おもちゃを取ることが多い子は、「友達のおもちゃを取ったんだ。いつもなんだからダメな子ね。」という言い方をされることがあります。そんな時、「ダメな子ね」と人格全体を否定する言葉をかけられた子供はどんな気持ちになるでしょうか？

ある朝、保護者が子供に「早く仕度して！会社に遅れちゃう！困った子」と怒っている場面に出会いました。子供は泣いています。保育士は親子の間で困った表情。先輩保育士が来て、「お母さんも会社に遅れると大変ですね。C君は大好きなママとバイバイするのが寂しいのかな？」と話しかけると一瞬母親の表情が落ち着きました。そして、C君は泣きやみ仕度を始めました。先輩保育士は親子の気持ちに寄り添い、そして担任保育士と子供を繋げてくれたようでした。

様々な思いを抱えた親子と寄り添いながら生活をする保育園。児童福祉法の施設である「保育園」は「子供の最善の利益」を守る責任があります。それには子供自身が安心して遊べる保育園であることが大切です。子供が「安心」と感じるには、自分の気持ちを自由に表現でき、それを受け止めてもらえる保育士の存在が重要です。そして、また保育士自身も自分の居場所としての保育園が好きになり、そこで子供や保護者と体験する様々な出来事を「みんなの利益」に繋げていく積み重ねが大事なのです。子供が朝起きて、「早く保育園に行きたい！」と言って、親子が喜んで来てくれ、「待ってたよ！」と保育士が迎えるそんな保育園を目指していきたいと思っています。